

多面的、多角的 あらゆる意味において改革推進を果たし、飛躍を目指す山桜会では母校との連携をさらに強化することと相互的に躍進しようという観点と母校の現状を一人でも多くの会員の方々に周知していただくことの必要性を重視し、母校校長と山桜会会長の対談を企画。まず、その第一弾として、秋雨と共に秋の訪れを感じさせる十月、追手門学院小学校川人公一校長を川原会長が訪問。約一時間にわたり、それぞれの立場から母校について語り合つた。双方にとって意義深いひとときであった。以下、その概要をダイジェストでお伝えします。

(於・追手門学院小学校校長室、敬称略)

川原 本日はお忙しい中、貴重な時間をお取り頂きまして誠に有難うございます。追手門学院は1888年明治21年にこの地で高島頼之助陸軍中将が借行社を創設され、すでに113年が経ちます。追手門学院の卒業生集団である「山桜会」もその歴史を踏まえて現在の母校である学校の教育内容について非常に関心があります。川人校長は追手門学院小学校の現状を踏まえて何に重点を置かれて児童を教育されているのかお聞きしたいのです。如何なるものでしょうか。

川人 まず本校の歴史については創立100周年を契機に教職員も一層学校づくりに力を深めてまいりました。そして創設期から現在までの年志書籍等を出すことにより、小学校の学院における位置付けが明確に認識されることになりました。このことが踏まえた教育を進めるための我々の共通意識や共通理解となつていきたいと思います。

理念である社会有為の人材の育成を基本としながら「敬愛」「剛毅」「上智」という教育目標の本柱は不変であります。その不易流行の精神を大切に、伝統的なことは変わるとなく尚かつ新しい教育を育んで行く事が小学校の姿勢であり、「敬愛」「剛毅」「上智」の目標の達成をめざして子どもたちに教育しているつもりです。私自身は子どもたちに「気品



川人 校長

『気品のある子』になつてほしいという思いが、10年間やつて参りました。

のある子』になつてほしいという思いが、10年間やつて参りました。

本校の子どもたちには理想的児童像として、礼儀正しく親切で何でも進んでやろうとする「元気な子」というのを掲げました。礼儀の大切さはもちろん、敬愛の心相手に対する尊敬の念など人や物に対してそういう精神をもつてが一番大切であると指導しております。「元気」と言つのは健康面又心の面で優れなければ元気が出ません。元気が出ることで総合的な人格形成が育つてまいります。つまり「気品のある子」になつてほしいという思いが、10年間やつて参りました。また「高」学力「強」体力「ねばり強い心」親切「の目標があります。それを達成してこそ「気品のある子」になります。

川原 今、川人先生がお話された礼儀正しさは先程も私が校門を入る時に下校する児童が帽子を取り、「礼」の姿を見せ、昔からの伝統が今も維持されていることにあらためて敬服いたしました。「礼儀正しさ」と「元氣な子」は外面的なものはもちろんですが教育の中身におきましても、その姿勢は大事なことだと思います。現在、社会は少子化になり家庭環境が昔と変わり、子どもを取り巻く教育環境そのものも大きな変化がみられます。そこで今の児童にも従来と同じような資質がそなわつていなければならない。また児童が授業を受ける姿勢に変化があるのでしょうか。

川人 おそらく時代を反映したなかで厳しくなつたものが随分変化してきていると思います。現在は子どもたちを擁護する言葉が随分出ております。もちろん大切ですが自ら我慢することや物事に向かふ力を養つて切確な態度を養うべき言葉は低くしてはならないと思います。

本校は90人を越す児童を教育している訳ですから反対に多人数と言つて点で友達同士の切磋琢磨がなされております。昔より少し緩やかですが、時代の中でやむを得ない面もあります。けれどその点は恵まれています。やはり厳しさは大切な面であり、その指導を続けて行きます。

又ひとり子や恵まれた家庭環境にいる子ども達にとつてやはり過保護、過干渉が自然と充満してきています。これも社会の現象ですが、どうしても家庭のそういう環境に流されるべきではありません。従つてより一層その指針を持って教育をしなければなりません。本校は今回も申し上げますが伝統を重んじてる中に、厳しさをしっかりと植え付ける教育を行いたいと思つております。

川原 先日、小学校の体育祭に参加させていただきました。そこで児童のモチベーションを高めた行動を拝見することができました。やはり、学校教育における「厳しさ」と「礼儀」と言つたところで、これがやはり少子化と言われ、家庭環境が全くなされていられる中でも、追手門学院小学校としては伝統教育が維持されているように思つたのです。

川人 もちろんそうです。いわゆる人間として「礼儀」が必要であるんだと、日本の習慣や文化のなかで礼儀正しさを規律としてと言つた事を純粋に受け入れる土壌が失われていく面があります。しかし本校の場合は頑なに「礼」を守り続けたい、それが社会において、相当重要な要素ではないかと確信しているからです。

今、キリッとしたその点の弱れがあるので、現実的に大人になり、社会に出た時、どうなっていくかが明らかになります。決して「リタリー」ではなく「けじめ」なり「礼儀」と言つものが社会の中で、特に日本文化の大切な部分であることを認識しておかねばなりません。

川原 ところで、最近注目を浴びた人に「不斉合成の研究でノーベル化学賞を授賞された名古屋大学の野依良治教授がおられます。野依教授は、産業に応用の出来ない化学は意味がない」「研究における産学協同の必要性」を強調されています。この意見は直接、小学校教育に結びつくものではないかもしれませんが、例えば理科の実験を教科書でやりやるだけが本当に児童に身につく教育方法なのか疑問



があります。理科は社会に役立つものを作り出すうえにおいて、どのような材料を使えばより良いものが出来るのかを調べる手段として、材料分析や化学反応を見るのだと、言つて児童達に理解させ、関心を持たせたつて実験をすればいいと思つたのです。つまり、学校教育と言つのは実社会に役に立つ教育も今後大切になって来ると思つたのですが如何でしょうか。

川人 確かに野依教授は、理科が好きになりなさいと言つた言葉を唱えたのですが意味深い事ですね。小学校に限らず、小中高ひいては大学に至るまでのしっかり系統性を持った学習形態が必要であります。これについては国の指導要領に於いて各教科書が作成され、その教科書も検定制度になっています。その中から各校が選択しているのですが、指導内容は1年生で習うこと、2年生で習うことと順に関連させているわけです。指導方法はただレクチャーだけではなく、よく言われている自主性を尊び、自ら学習し、個性の伸長をはかり興味を生み出すよう研究されています。本校も熱心に研究しています。

小学校教育は特定の学問に突き進むのも良いのですが、児童の基礎基本の時代を預かる教育機関ですので、芸術教科に至るまでを全てしっかり指導する必要があります。そのため本校は37年、昭和42年(私)が本校に着任した時より教科担任制が実施されました。すなわち高学年においては専門性のある先生方に「教科

年会費の導入に「理解」と「協力」を

財務担当副会長 川口 正弘

川原会長のもと、新生山桜会が誕生して早半年が過ぎ去り、この間各委員会を中心につけてない活動が繰り広げられてきました。そしてこれからはますます活発に活動していくものと確信いたしております。さらに山桜会の将来の展望を考えると、東京支部だけでなく、全国各都市に支部の創設や、同窓会館(仮称山桜会会館)の建設をも視野にいれ、山桜会のますますの発展の基礎を築く時期にきています。山桜会活動が活発になればなる程必要になってくるのは活動資金であり、今の終身会費だけでは将来、少子化の影響もあり収入は減る一方、既に来年は約150万円減の予想(今のうちに何らかの手をうたなければならぬものと考えます。勿論、今期の大きな課題であるお金を生み出す方法は今後とも継続して検討していくとし、新たに年会費制の導入を会長・副会長の総意として10月6日の理事会に提案させていただきました。会員の皆様方には山桜会の将来の為、年会費制の導入に「理解」を賜り「協力」いただきますようお願い申し上げます。

平成12年度決算13年度予算について

財務委員長 石津 良行

平成13年度山桜会総会が6月24日(日)午前11時から母校追手門学院小学校講堂において開催されました。議事進行に合わせ、平成12年度山桜会収支計算書及び平成13年度予算案の内容を報告致します。収支決算につきましては、収入の部におきましては、会員皆様方のご協力によりまして、賛助金、会報広告料並びに名簿販売料収入が確保できました事に、お礼申し上げます。支出の部では、会報発行費が突出しておりますが、会報を通じて山桜会活動の活性化、会員相互の結びつきを必要とされるものであります事を「ご理解願います。又、予算案におきましては、前年度予算と同規模の予算を組ませていただきましたが、本年度につきましては、11の各委員会の活動を支援する意味におきまして、予備費の拡大を行いました。又、将来の山桜会の財政を確固たるものにする為に、山桜会基金積立金を計上させていただきました。以上報告致しますと共に、改めまして会員皆様方のご支援ご協力に感謝いたします。